

# それでも焼く、使う 炭焼きは天下の楽しみ

幕田忠一（福島県伊達市）

## 炭が焼けるにおい

2月5日朝、目が覚めて玄関を開けると銀世界。30m離れたところにある窯からは、炭を焼くにおいがする。ああーいいにおい。3日夕方に火入れした窯は、一晩中元気に働いていた。それが愛おしく、嬉しくなった。煙もいい色になりつつあり、朝焼けをバックにシャッターを押した。

私は1950年に農家の長男として生まれた。懸命に働き養蚕に従事したが、赤字が続いて農業から離れ、26歳のとき、サラリーマンに転職した。幼い頃から山仕事が好きで、林業と炭焼きをして暮らすのを楽しみに定年まで勤めた。

2010年12月、退職となった。これから夏場は米と野菜づくり、冬場はあんぼ柿の生産、シイタケの原木切りと炭焼きという生活設計を立てた。



2月5日朝、元気に働く炭窯

幕田さんが  
焼いたカシ炭



写真=編集部、左も



幸いにも、私が退職する15年ほど前まで父親が炭焼きを生業としていたので、その技も若干知っていた。朽ちた窯の再建は、父の指導でその年の暮れまでには完成に至った。

### 原発事故後も焼き続ける

炭焼きを始めて3カ月も経たないうちに原発事故が起こった。放射能のせいで計画はメチャクチャだ。

所有する山林10haには多くのナラやクヌギがある。また私は、ナラとクヌギの実を集め、苗をつくって自宅周辺の畑にも植栽した。その木も大きく生長していた。これらでシイタケの原木を切り出しつつ、残った部位はすべて炭にして木を無駄なく使い切る計画だったが難しくなった。

この地域は昭和40年（1965年）頃まで冬季間の仕事といえば炭焼き、紙すきだった。50年代になって養蚕が価格低迷で一挙に廃業に追い込まれた。そんなとき、活路を見出したのが原木シイタケ栽培だった。良質な原木が身近にあったのだ。冬季間の出稼ぎに行かなくても何とか暮らしているようになったのは原木シイタケのおかげだった。原発事故後、私たち林地所有者は立木補償として1㎡当たり5円いただいた。事故から11年。この金額でいつまで補償しているというのだろうか。ここ伊達市梁川町より放射線量が高いところも



筆者(71歳)。伝承芸能の千秋萬歳をしているところ

たくさんある。県内の立木は一時、赤いレッテルを貼られてしまった。その有効利用を図りたい。パルプの材料にすればいいと言われているが、どうだろうか。山に重機を入れ、ただ伐採すればいいというものでもない。たとえば高株（伐採位置が高い）での伐採は萌芽の抑制になり、手入れのない山では土砂崩れの可能性が高まる。かといって、放射能が減るまでこのまま放置しては、ナラ枯れ、クヌギ枯れが広がる。そうなる前に利用しないと木がもったいないし、かわいそうだ。

私は、事故後もせっせと木を切り、炭を焼いてきた。ナラやクヌギが枯れる原因となる害虫は、30年生以上の木に多く、若木の被害は少ないよう

